

時間について

私たちが生きていく上において、時間も空間も非常に大切なものだ。私という人間がこの世に「存在」していることを示す大切な指標として、時間と空間を用いる。一九七一年四月二十九日の午後三時に、私は自宅の書斎にいますというように表現する。

あるいは、子どもの帰りがおそいので気にして電話をかけてこられた母親に、幼稚園の先生が「十分前には、園を出られましたよ」といわれると、母親は「もう五分位で帰ってくるだろう」と安心される。つまり、十分前に自分の子が幼稚園の前に「存在」していたということがわかると、母親は幼稚園から自宅までの空間的距離と、それを歩いて帰ってくる時間とを測り、子どもの帰りを安心して待つことができるのである。

河合隼雄



さて、このように大切なものであるが、ひるがえって考えてみると、時間も空間も何とつかみどころのないものだろう。一体、この空間の「端」はどこなのだろう、時間の一番始めの「はじまり」はどこからのだろう、考えだすと大変なことだが、私たちがおとなは、あまりこんなことを考えずに暮らしている。

ところが、子どもたちは案外こんなことを考えているらしい。「あの山の向こうに何があるのだろう」とか「空のもっともっと上には何があるのだろう」とか。そして、彼らは奇妙にも、こんなことをおとなに聞いても仕方ないことも、何となく感じていられるらしく、なかなかおとなには、いつてくれないものである。ある時小学生たちと遠足したとき、どの山にも森にも持ち主がある

ことがわかってくると、そのうちの一人が疑問を提出した。人類が現われるまでは、どの山も森も誰のものでもなかったのに、どうして今、全部持ち主がきままっているのか、「そんなのは不公平だ」というのである。たしかに、いわれてみるのもっともなような気がする。本来は誰のものでもなかった土地を、勝手に区切ってしまう、それを個人の所有にしてしまう。そして、他人はその空間を自由に使用することができない。

この小学生の疑問がおもしろかったので、私は時間の方についても、同じようなことがいえるか考えてみた。たとえば、一九七一年四月二十九日の二十四時間というものをとって考えると、こちらの方は空間の場合と違って所有権争いをしなくてもよきそうである。これはニクソン大統領のものでもあったろうが、私のものでもあったし、あなたのものでもあったし、隣の犬のゼットのものでもあったわけである。

時間の所有に関しては、先ほどの小学生のように、不公平さを嘆かずにはすまされそうである。これはなかなかおもしろいことである。幼稚園にあるブランコにしろ、誰かが占領すれば、他の子どもはそれがあくまで待っていなければならない。玩具にして、誰かが使うと他の者は使えない。ところが、時間だけは、誰もが「自分のもの」であると主張しても、他人と取り合いをしなくてもよいものである。

しかし、困ったことに「私の時間」は勝手にどんどん逃げ出してしまうのである。きょうという日を、私がいかに無為に過ごしても、時間の方ではおかまいなしにどんどんと過ぎてしまつて、きょうという日はもう二度と帰ってこない。ブランコに乗った子は、ブランコをゆすらずにぼんやりしていると、次の子にゆすることを強いられる。玩具を持ってぼんやりしていると、「あいてたら貸してね」と誰かにいわれるだろう。ところが、私がいかに無為にすごしても、その時間を他人が借りにはこないものだ。こうして、私を油断させておいて、時間は何食わぬ顔で過ぎ去ってゆく。

こんなように、つかみどころのない時間、すぐに逃げ去ってゆく時間を、もう少しはつきりとしたものにするために、人間は時間を区切ることを始めた。

時間を区切る

無限に流れる時間を区切ることを人間が考えはじめるためには、自然現象としての夜と昼、夏と冬などの体験がその基礎となつていふことだろう。特に太陽や月の運行は、時を測るための大切な指標であったことと思われる。日の出と共に起きて働き、日暮れには家に帰って休む。このような生活にとつて、時間の流れや、時間の区切りは自然のリズムと密接に関連するものであった

だろう。このような状態のときに、人間の経験する「時間」は、彼の体感や感情と結びついたものとして、人格の深部にまでかわりをもつものであったろう。

幼児の時間体験を観察してみると、なかなかおもしろいことが認められる。幼稚園にいる子どもたちは、どのように「時間を区切って」いるのだろうか。幼稚園の庭の片すみで、かたつむりをつけて、それが殻からからだを出し、目を出して動きはじめるのを、いっしょうけんめいに見つめている子、この子はどんな時間を経験しているのだろうか。かたつむりを見つめている間の「時間の区切り」は、一体どうなっているだろうか。

幼稚園が九時に始まるという場合、おとなが考えるのと同じように、「九時に間に合うように」登園してくる園児が何人いるだろう。おおかたの子どもは、お母さんが行きなさいというままに、あるいは兄弟や友人たちにさわれるままに、登園して来るのではないだろうか。だからといって、彼らは「時間の観念がない」とか、幼稚園はいつ行ってもかまわないと思っっているというでもない。彼らは彼らなりに、「おくれてはいけない」ことも知っているのである。

文明人は時計によって時間を測る。それによって、一日は二十四時間に正確に区切られ、共通の時間が設定される。これは多くの人間が社会をつくっていくためには、非常に大切なことであ

る。これによって、われわれは友人と待ち合わせもできるし、学校も会社も、同一時刻に一斉に始めることもできる。映画の始まる時間、バスの時間、テレビの人気番組の始まる時間、これらすべてが決められており、われわれは共通の時間をきざむ時計を頼りにして生活している。時計の発明によって、人類はどれほど時間を節約できるようになったかわからない、本当に便利なことだ。

ところで幼児たちは、さきへのべたようにおとなのもつ時計によって区切られた時間とは異なる時間を生きていようだ。「きのう」とか「あした」とかの意味も、はっきりしていない子もある。「また、あしたにしようね」などといっている子も、それは厳密にあしたということをしすのではなく、「近い将来」を意味していることも多い。

あるいは、何かに熱中していたが、何かで中断しなければならなくなったり、「また、あしたにしよう」というのは、このことをいうことによって、中断することを自らに納得させようとする意味あいで行っている子もある。この場合の「あした」は、二十四時間の経過後に存在する時期などではなく、断念しなければならぬという気持ちと、何か希望を残しておきたいような気持ちの交錯した現在の状況をのべている表現なのである。

道くさをしたために叱られる幼児たちが、悪かったという気持ち

ちをあらわしながら、何とも納得のいきかねる表情をしていることがよくある。彼らも叱られながら、「おくれてしまった」「おそくなつて悪かった」ということはよくわかっているのである。しかし、なぜおそくなつたのだろう。「ぼくは何もしてなかったのに」、「ちよつとだけ、おたまじゃくしを見てただけなのに」と思っているのである。たしかに子どもたちは「ちよつとだけ」何かをしていたのである。しかし、残念なことに、それはおとなのもっている時計では、「一時間も」道くさを食っていたことになるのだ。

時間の厚み

おたまじゃくしを見ていた子どもが、一時間を「ちよつとの間」と思ったように、われわれおとなでも、同じ一時間を、長く感じたり短かく感じたりする。恋人と話合っていると、すぐに時間がたつてしまつて別れのときがくるのに、嫌な先生の説教は少しの間でも随分長く感じられる。時計の上では一時間であつても、経験するものにとっては、その一時間の厚みが異なるように感じられるのである。もちろん、時間そのものには厚みなどあるはずがないから、あくまで、それを経験するものの主観として、厚みが生じてくるのだ。

何かひとつのことに熱中していると、時間が早くたつていくこ

とは誰もが知っていることである。といつても、何かひとつのことをしていると、必ず充実した時間を過ごしたことになるとは限らない。たとえば、テレビのドラマなどを見るときもなく見ていると、ついひきこまれて終わりまで見てしまう。終わってみるといつの間にか一時間たつてしまつている。しかし、このあとでは充実感よりも空虚な感じを味わうことだつてある。時間は早くたつたと感じられたが、その厚みの方はうすく感じられるのである。

あるいは、ひとつのことをしていても時間が長く感じられるときもある。その一番典型的な場合は、「待っている」時間である。誰かが来るのを待っているとき、われわれはなかなか他のことができない。そわそわしながら待つ、しかもその間は随分と長く感じられるのである。「待つ」ということだけをしているのだが、時間を長く感じてしまう。

これらのことを考えると、自分のしていることに、その主体性がどのように関係しているかにしたがつて、時間の厚みが異なつてくるらしいと思われる。「待つ」ことは、受動的なことである。その人がいつ来るかは、その人の行動にまかされているわけで、待っている方としては、ただそれにしたがつて待つより仕方がないのである。これはテレビの場合でも同様である。テレビを見終わつて充実感のない場合は、私たちがテレビを見たのではな

く、テレビが私たちをひきこんでしまったのである。私たちは受動的に見ていたのだ。

子どもがテレビを見すぎることはよく問題になる。たしかにテレビを見すぎることは、子どもが「与えられ映像」を受動的に楽しむことによって、主体的な時間をもたなくなる点に危険性が存在している。しかし、テレビの主体的な見方だつてあるはずである。怪獣にしろ、チャンバラにしろ、子どもにとっては必ず経験しなければならぬ世界なのである、だから、それを見たいときには「主体的」に十分に見させることがいいのではないか。主体的に十分体験したものは、常に早く「卒業」する。

ところが、いろいろと親の介入があつて主体的にテレビを見えない子どもは、なかなか卒業できない。いつも受動的にテレビを見て時間を過ごしてしまう、時間はすぎ去っていく、テレビはうつっている。主体はテレビや時間の方であつて、子どもは受身の立場に立ってしまったのである。ついでにつけ加えておくと主体的にテレビを見させるということは、子どもの「見たいままに放任する」ことではない、放任の中からは主体性は出てこない。

テレビは見たいが勉強はどうするのか、

父親は野球が見たいが子供は漫画が見たい、

これをどう解決するか。

食事中にテレビを見ないのはわが家のおきてである。ところが、食事時間にどうしても見たい番組ができた。これをどうするか。

これらの葛藤と対決していくことによってこそ主体性が得られる。対決を通じて獲得した時間、それは主体性の関与するものとして、「厚み」をもった時間の体験となるのである。

ここに、充実した時間体験の問題点が生じてくる。つまり、子どもに充実した時間を与えてやろうと思ひすぎるあまり、一時間のうちに「このこともやらせてやろう」「あのことも教えてやろう」と思つて、親や教師が熱心になればなるほど、子どもの主体性を奪ってしまうことになつて、子どもはいろいろなことをしながら、それは厚みのない時間体験になりさがつてしまうのである。

私たちが、時計で測る「時間」にとらわれ、「能率」ということにこだわり始めると、「能率的教育法」という美名のもとに、子どもたちの主体的な時間を奪つてしまう危険性が生じてくるのである。

「このち」と「とき」

この稿の出発点として、私は、空間の所有権争いはあるが、時間には所有権争いをしなくてもいいとのべた。ところが、「子ども

たちの主体的な時間を奪ってしまう」などということを書かねばならなくなりました。

人間社会というものはむずかしいものである。本来ならば各人が所有して取り合いをしなくてすむ「時間」も、人間関係ということが存在してくると、ややこしくなってくる。テレビのチャンネルの奪い合いのように、われわれは時間の奪い合いをしなくてはならない時だである。このように考え始めると、幼児教育にたずさわるものはこわくさえなってくる。子どものことを考えて、何かしてやるようなつもりでいながら、結局は彼らの時間を奪うようなことをしていないだろうか。

限られた時間を奪い合うことを避けるためには、時間を共有することを考えねばならない。ありがたいことに、それは共有することによって、分け前が少くなることはない。

時間は無限である。しかし、「私の時間」は限られている、人間一人一人のもち時間は、長短はあるにしろ無限ではない。時間のことを考えると、私たちは人の「いのち」のことを考えざるを得ない。幼稚園に來ている一人一人の子が、その「いのち」をもっているように、子どもたちはその個人の時間をもち、それを共有する場として、幼稚園にやってくる。このように考えると、幼稚園の子どもたちと過ごす一瞬一瞬が、かけがえのない大切なものとして感じられてくるのである。

さりとて、前にものべたように、こちらが押しつけがましいことをすると、かえって子どもの主体的な時間をとってしまうことになる。個々の子どもの「いのち」の流れはその個性にしたがっているものだ。私たちはこちらからおしつけるよりも、その子どもたちのいのちがどのように流れるかを、見守ってみてはどうであろうか。入園した当時は集団のなかなかなかはいれず、いつも庭のはしの方に立っていた子が、日がたつにつれてだんだんと元気になってくる。そして、友だちがブランコをする下に立って眺めていたりするようになる。友だちの運動を楽しそうに、時にはうらやましそうに見ていた子が、ある日、とうとうブランコに乗ってみる。その時の彼の顔の輝きはどんなものだろう。この子が思い切ってブランコの綱にさわってみた「とき」、それは何と重みをもった「とき」であろうか。時間にも厚みがあるようだということはさききのべた。ここに示した「とき」はそのような厚みの最高に凝集されたものであり、限りのない充実感をもっている。ブランコのひとりひとり、その子は自分の「いのち」のリズムを感じたに違いない。

このような意味のある「とき」の体験は、教師がそのつもりになつてみれば、幼稚園のあちこちで生じていることが認められるだろう。「先生、こんなところに毛虫がいたよ」と叫ぶ子ども、生まれてはじめて友だちの玩具をひったくった子ども、珍らしい

石を発見した子ども、その子たちの経験の一瞬にいのちの躍動がこめられている。そんなときの先生の態度や一言が、どれほど彼らに生きていることの意味の体験を深くせしめることだろう。大切な「とき」は信頼し得る人と共有することによって意味が倍加されるものだ。

子どもたちのこのような主体的な「とき」の体験を多くするためには、私たちおとなは、できるだけ不要な干渉をせずに、「とき」の熟するのを待たねばならない。気の弱い子が自らブランコに手をふれるまでには、それ相應の時日を必要とする。「待つ」ということはつらいことだとききにのべた。しかしこの場合、私たちは「待つ」この意味を知り、主体的に待つことができるのだ。その間に無為に時が流れ、私たちは受動的に待っているのではない。何も無いように見えながら、その裏で時が熟していくのを私たちは知っているのである。よき教師は、退屈せずに主体的に「待つ」ことを知っている。そして、その「とき」がきたとき私たちはそれを子どもたちと共有し、意味を確かめ、経験を共にすることができると感じる。「存在感」は、何時何分にどこにいたというような意味での存在を、はるかに越えたものとなっているはずである。

(天理大学)

日本幼稚園協会主催

幼児教育講習会

◆講演の内容は次の通りです。

七月二十二日

「幼児の教育は再建されなければならない」

お茶の水女子大学教授
附属幼稚園園長 周郷 博氏

「精神の退廃について」

美術評論家 久保 貞次郎氏

七月二十三日・二十四日 ゼミナール

(数名の講師が予定されて、計画は進行中です。当日受付で計画表をお渡しします)

七月二十五日 シンポジウム

「これからの幼児教育はどうあるべきか」

元お茶の水女子大学学長 蠟山 政道氏ほか
東京都教育委員長

◆訂正 第二部会費 四、〇〇円(テキスト代別)